6－3　拠点形成のスタディー（三笠）

■地形と歴史は現在のまちを形づくってきた二大要素

地形と歴史は、景観成立にかかわる二大要素であり、その両方の視点から、いかにして景観が成立したかを知ることは、まちの構造を見定めることにつながります。

三笠市の場合、東西に市域を貫流する幾春別川に沿って、谷底平地と、南北両岸に河岸段丘地形が分布しています。そこを中心に、石炭産業の発展とともに山麓に向かって市街地が拡大し、石炭産業が衰退して以降、山麓からの市街地の縮退と、同時に市街地内に空地が生じ始め、今日に至っているという歴史的変遷に目を配る必要があります。

■地形・土地利用の構造からみた三笠の景観上の骨格

三笠市の自然景観の基盤は、河岸段丘とそれを貫流する幾春別川にあります。

幾春別川は、桂沢から谷合いを縫って流れ、「桂沢神居古潭」という南北に走る尾根を貫く狭隘部をぬけると、幾春別、弥生、唐松といった市街が位置する河岸段丘面の間に広がる谷底平地を蛇行しながら流下します。

谷底平地にひろがる農地や市街地は、氾濫の被害を受けてきたことから、幾春別から川下では、河道の付け替えなど河川改修が行われました。河川と人々とのせめぎ合いの歴史の中で、1889 年に幾春別での河道切り替え工事の際に出現した「魚染めの滝」とその逸話、幾春別市街に残る街中の地名に名残がみられるなど、その扱いについて、留意すべきです。

■市街地構造にみられる、地区毎の独立的発展過程

市街地に目を転ずると、1879 年に北海道の近代炭鉱の端緒となる官営幌内炭鉱が開坑し、石炭産業の立地に不可欠な鉄道は、1883 年の幌内～手宮間に幌内鉄道の営業が開始されました。

1888 年には幌内太（三笠）～幾春別間が延長され、同年に幾春別炭鉱も開坑、1902 年から 1905 年の間に、奔別炭鉱・弥生炭鉱・唐松炭鉱・ヌッパ炭鉱が相次いで開坑しました。

それぞれのヤマ元には、幌内・唐松・弥生・幾春別の市街地が独立的に形成されました。

幌内は、幌内川沿いの狭い谷合いと斜面に市街地が広がり、唐松・弥生・幾春別の市街地は幾春別川の、河岸段丘上あるいは谷底平地に市街地が展開しました。

このように、それぞれの市街地は、炭鉱の「企業城下町」として計画的に地割がなされ、相互に独立した地域社会を形成した経緯を持っています。

炭鉱直下の商店街の面影を残す幌内市街地や幾春別市街地、三角屋根の美しい炭鉱住宅が残る弥生地区、幌内線の駅の面影を残

す旧唐松駅舎など、当時の炭鉱まちの暮らしを想起させる要素が点在しています。

これらは、市街地の歴史をひも解き、場の記憶を呼び寄せる手がかりとなる要素であり、人々の思いを束ねる素材として活用が求められます。

■幾春別周辺に見られる地域活性化の資源「宝」

石炭を含む地層（幾春別層）は、北東―南西方向に軸をもつ地向斜に沿って分布しています。褶曲する炭層が地表に現われた個所を幌内川が浸食したことが、石炭の発見につながり幌内炭鉱の起源となりました。同様に、幾春別川の浸食により露頭炭として川岸に現れたことが幾春別炭鉱の起源となりました。これらの発見が、その後の地質調査につながり、炭鉱開発の端緒となりました。

なかでも、幾春別炭鉱の発祥の地は、当時の面影を残しており、貴重な資源と言えます。この一帯は、1921 年に文豪の大町桂月が渓谷美を「桂沢神居古潭」、温泉宿を「神泉閣」と名付け、歌人の若山牧水が訪れるなど文化的資源でもあります。同時に、中生代から新生代の地層が露出し、なかでも白亜紀層が露頭する地質学的に貴重な場所でもあります。さらに、この一帯はカヌーなどの利用や、かつての森林軌道跡なども見られ、環境学習・レクリエーション・風景観賞・散策など、地域の多様な歴史や地質的構造特性が密度高く分布しています。

その具体的な保全・活用方策については優先的に具体化を検討することが求められます。

■選炭工程に見られる「自然立地的施設配置」

坑口から運ばれた原炭を選炭し鉄道貨車で出荷する、一連の選炭工程の施設配置には、知的好奇心の対象となる様々な配慮が見られます。

坑口を高台に設け、斜面落差を利用しながら選炭し積込ビンに落とすという構造が、住友奔別鉱（奔別立坑開発前）・住友弥生鉱・北炭新幌内鉱に共通して見られます。また、選炭工程で大量の水を必要とすることから、各炭鉱では、河川との位置関係を考慮し、選炭施設群が配置されています。

このように、選炭工程に関わる施設群が、地域の地形的特徴を読み解き、「自然立地的施設配置」をしており、これらの配置特性を踏まえた景観特性の表出を検討する必要があります。

コンセプト

幌内地区におけるエリアイメージ（仮）

炭鉱時代の面影、復元する自然と創造蓄積の芸術空間、汽笛が響く沢の街

イメージの具体化、目的、効果

石炭のある暮らしを伝える景観づくり

目的；
- 幌内地区のオリジン（起源）と発展の過程を目に見える形で明確に伝える
- 石炭を活用した催しや体験メニュー、新たな産業創出を通して炭鉱街の魅力、産業文化を発信し、新しい時代の炭鉱街の風景をつくる

効果；
- 幌内地区成立の記憶の伝承、地域らしさの確認
- 炭鉱街コミュニティーの構築、熟成
- 炭鉱を学ぶきっかけ、糸口をつくる

幌内線でつながる地域づくり

目的；
- クロフォード公園をエントランスとして幌内炭鉱跡と幌内市街地を幌内線を軸に連続化する
- 炭鉱の時代に幌内線の果たした歴史的役割の理解を深め、特有の魅力を発信する

効果；
- 幌内地区への誘導、引き込みのきっかけ
- 音、におい等、幌内らしい五感の風景の連続化による地域としての一体化、拠点間連携
- 幌内の地域イメージの訴求力の強化

復元する自然と共生した地域づくり

目的；
- 衰退した炭鉱産業跡に復元する産業的自然環境との共生と、そこを舞台にした芸術活動等の文化的蓄積によってこれからの幌内の風景、地域をつくる

効果
- 環境時代に生き続けられる豊かな地域の持続
- 新しい価値、魅力の創造
- 環境教育による地域の次代を担う人材の育成

＜総合的方向性＞

取り組み

「幌内線でつながる幌内地区トレイル」の創出

- 様々なプロジェクトによる進化、熟成と地域内外の人的ネットワークの醸成
- ストーリーによる資源の連携
- 線路、河川、道路が並行する幌内地区の特性を生かした活動プログラム
- 連続（ネットワーク）と拠点（コンテンツ）創出によりエリア全体をフィールド化

＜突破口としての取り組み＞

○地域アイデンティティーとしての景観づくり
- 地形と歴史に深く刻まれた景観を作り出している資源の発掘と評価・保全・整備
- 地域の共有財産として大切に扱っている姿勢を示すための見せ方の工夫（季節毎・時間毎の演出、視点場＆視対象）
- 日々の暮らしの中で意識を持って取り組み、新しい時代の炭鉱地域の景観をつくり出す。

○フットパスを活用した取組
- 産炭地の景観の魅力を歩いて実感してもらう。
- 様々なテーマを持った拠点を用意する
- フットパスを歩く人の楽しめる要素を多くの人を巻き込んで創る。
- 他所からの来訪者だけでなく、地元住民にも体験してもらい、地域を良く知ってもらう。

○イベントの開催
- 炭鉱都市としての歴史性を活かしたテーマで段階的に地域の歴史や炭鉱を意識づける。
- 「地域にとって何が大切か」を常に意識して取り組み、しっかりと心に残る体験にする。
- 地域の多様な人材が連携して取り組み、無理なく持続可能な活動としていく。

＜プロジェクト＞

プロジェクト①

「（仮）幌内炭鉱景観公園活用ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ」
- 常設展示ではない変化する展示と蓄積
- 炭鉱ｼｽﾃﾑの理解を深めるしかけ

▽
- アーティスト参画インスタレーション会場
- 炭鉱住宅を活用したアート合宿
- ﾓﾀﾞﾝｱｰﾄﾐｭｰｼﾞｱﾑ等、既存施設との連携
- 地下模型や炭鉱ｼｽﾃﾑを伝えるｱｰｶｲﾌﾞ化
- 幌内１丁目のゲートタウン化

プロジェクト②

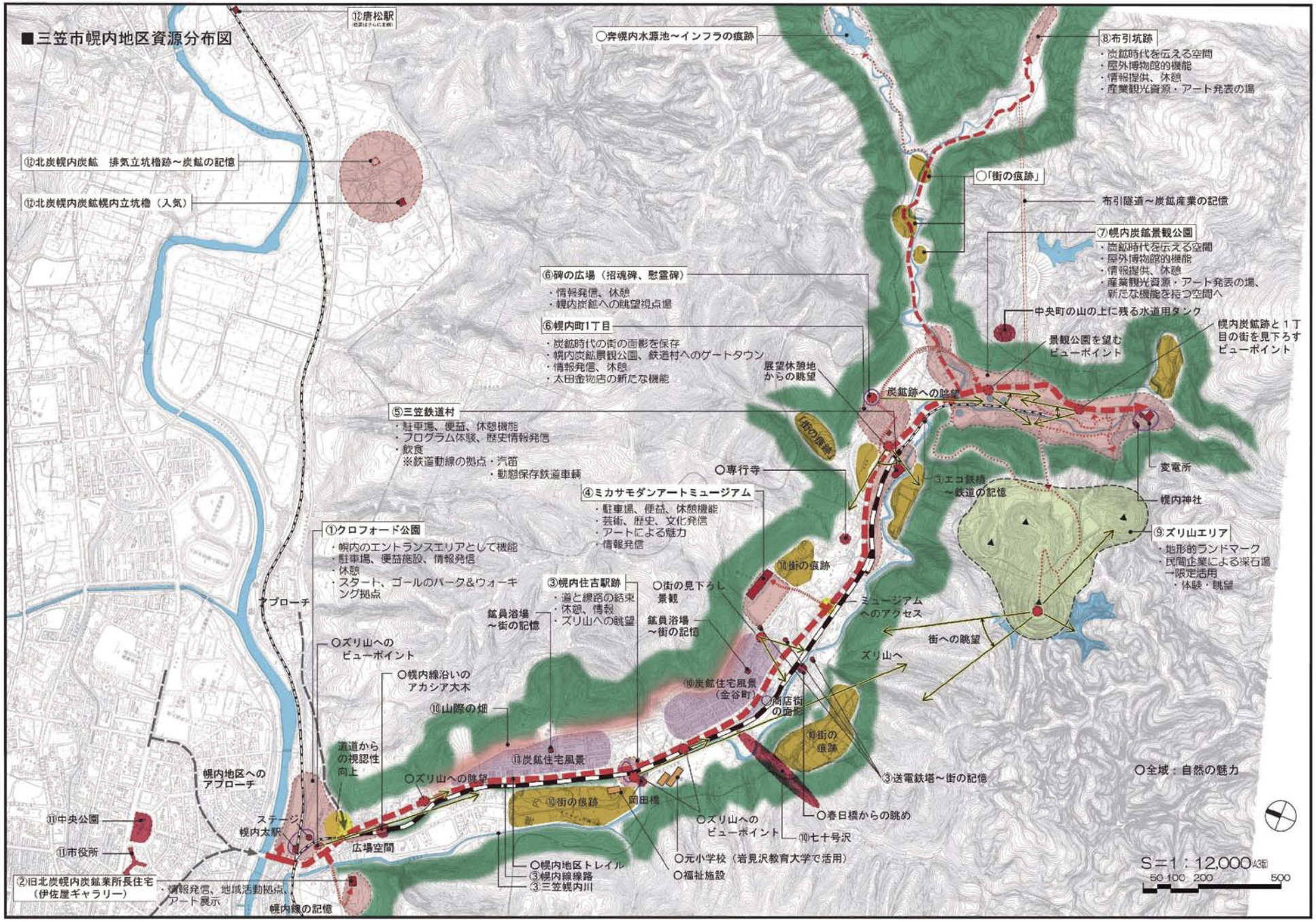
「（仮）幌内線フットパスプロジェクト」
- ｸﾛﾌｫｰﾄﾞ公園～景観公園間の周辺集落を含めたﾌｯﾄﾊﾟｽｺｰｽ設定
- ｸﾛﾌｫｰﾄﾞ公園のエントランス機能強化、鉄道村の拠点化、幌内線活用による景観軸化

▽
- 幌内線全線を使ったﾄﾛｯｺ・鉄道馬車運行
- 休憩拠点の準備＆シークエンスとシーン景観、視点場の保全
- 商工業者、農業者等の本業との関係を明確にして参加意欲を高め、連携を強化
- 炭鉱施設の拠点化・視覚化・アーカイブ化
- 豊富な情報提供＆適切なガイドの育成

プロジェクト③

「（仮）石炭＆鉄道活用プロジェクト」
- 石炭を使った学習・催し企画
- 線路を舞台とした地域学習

▽
- 石炭を使った風呂、ストーブ、SL 体験
- 石炭をエネルギーに食の体験
- 映画スタンドバイミー体験
- 石炭をキーワードの商品づくり（幌内１丁目“イメージ再現型商品”開発）


■三笠市幌内地区資源分布図
⑫唐松駅
○奔幌内水源池～インフラの痕跡
⑧布引坑跡
・炭鉱時代を伝える空間
・屋外博物館的機能
・情報提供、休憩
・産業観光資源・アート発表の場
⑫北炭幌内炭鉱　排気立坑櫓跡～炭鉱の記憶
⑫北炭幌内炭鉱幌内立坑櫓（入気）
○「街の痕跡」
布引隧道～炭鉱産業の記憶
⑦幌内炭鉱景観公園
・炭鉱時代を伝える空間
・屋外博物館的機能
・情報提供、休憩
・産業観光資源・アート発表の場、新たな機能を持つ空間へ
⑥碑の広場（招魂碑、慰霊碑）
・情報発信、休憩
・幌内炭鉱への眺望視点場
中央町の山の上に残る水道用タンク
⑥幌内町1丁目
・炭鉱時代の街の面影を保存
・幌内炭鉱景観公園、鉄道村へのゲートタウン
・情報発信、休憩
・太田金物店の新たな機能
景観公園を望むビューポイント
幌内炭鉱跡と１丁目の街を見下ろすビューポイント
展望休憩地からの眺望
炭鉱跡への眺望
⑤三笠鉄道村
・駐車場、便益、休憩機能
・プログラム体験、歴史情報発信
・飲食
※鉄道動線の拠点・汽笛
・動態保存鉄道車輌
「街の痕跡」
○専行寺
③エコ鉄橋～鉄道の記憶
変電所
幌内神社
④ミカサモダンアートミュージアム
・駐車場、便益、休憩機能
・芸術、歴史、文化発信
・アートによる魅力
・情報発信
⑨ズリ山エリア
・地形的ランドマーク
・民間企業による採石場一限定活用
・体験・眺望
①クロフォード公園
・幌内のエントランスエリアとして機能
・駐車場、便益施設、情報発信
・休憩
・スタート、ゴールのパーク&ウォーキング拠点
⑩街の痕跡
③幌内住吉駅跡
・道と線路の結束
・休憩、情報
・ズリ山への眺望
○街の見下ろし景観
ミュージアムへのアクセス
プローチ
鉱員浴場～街の記憶
鉱員浴場～街の記憶
街への眺望
○ズリ山へのビューポイント
ズリ山へ
○幌内線沿いのアカシア大木
⑩炭鉱住宅風景（金谷町）
⑩山際の畑
商店街の面影
⑩街の痕跡
道道からの視認性向上
⑪炭鉱住宅風景
幌内地区へのアプローチ
○ズリ山への眺望
③送電鉄塔～街の記憶
○全域：自然の魅力
⑩街の痕跡
岡田橋
⑪中央公園
ステージ
幌内太駅
○春日橋からの眺め
○ズリ山へのビューポイント
⑩七十号沢
⑪市役所
広場空間
○元小学校（岩見沢教育大学で活用）
○幌内地区トレイル
③幌内線線路
③三笠幌内川
○福祉施設
②旧北炭幌内炭鉱業所長住宅（伊佐屋ギャラリー）
・情報発信、地域活動拠点、アート展示
幌内線の記憶
S＝1：12,000 A3版
50 100 200 500

コンセプト

幾春別・弥生・唐松地区におけるエリアイメージ（仮）

褶曲する地層に挟まれた炭層と幾春別川に削り出された地形と産業史が織り成す街

イメージの具体化、目的、効果

地層と地形が生み出した景観の表出

目的；

・地質学的に、地区のオリジン（起源）と発展の過程を目に見える形で明確に伝える

・炭鉱 GEO PARK の創出

効果；

・町の基盤である地形・地質、それを洗堀した幾春別川によって街の骨格が形成されていること、洗堀が石炭層を表出させ、洪積世に成立した河岸段丘に市街地を発展させた歴史を、浮き彫りにする。→三笠のまちの基盤と歴史という、目に見えない資源を、景観を手掛かりに表出

炭層と地形を読んだ炭鉱システム

目的；

・奔別、弥生、唐松、各炭鉱システム（坑口から選炭機～ホッパー～貨車）を実現させた、地形や地質を解読し、時代の最先端の技術力を持って、将来を構想した当時の人々の力強さを、炭鉱遺産をシンボル、ノードといった景観イメージとして、視覚的に伝える

効果；

・産業の技術、技術思想、まちづくりの構想力など、炭鉱を学ぶきっかけ、ガイド案内の糸口をつくることができる。また、当時の様子の伝承と写真画像のアーカイブ化

川谷と地形が織りなす渓谷と歴史

目的；

・幾春別神居古譚をコアとし、そこでの学習（博物館や資料館）とレクリエーション（カヌー、サイクリング、フットパス）を通じた地域の自然史や産業史（森林施業、炭鉱業）、文芸史を学ぶ

効果；

・自然、アウトドアガイドの育成、・新しい価値、魅力の創造・環境教育による地域の次代を担う人材の育成

＜総合的方向性＞

取り組み

「地形と川によって形作られた炭鉱の記憶を浮き彫りにする仕掛け→気づき」

・様々なプロジェクトによる進化、熟成と地域内外の人的ネットワークの醸成

・屈曲する幾春別川、段丘地形、川周辺に賦存する地域資源の特性を生かした活動プログラム

・通路 Path と河川 Corridor と拠点となる Symbol と、人の動きと思いを束ねる Node によるイメージ創出

＜突破口としての取り組み＞

○地域アイデンティティーとしての景観づくり

・地形と歴史に深く刻まれた景観を作り出している資源の発掘と評価・保全・整備

・地域の共有財産として大切に扱っている姿勢を示すための見せ方の工夫（季節毎・時間毎の演出、視点場＆視対象）

・日々の暮らしの中で意識を持って取り組み、新しい時代の炭鉱地域の景観をつくり出す。

○景観を舞台にしたフットパスを活用した取組

・産炭地の魅力を、ガイドによる案内、ガイドポストにより、歩いて実感してもらう。

・地域の歴史や地質にベースのある資源を楽しく学ぶ拠点を用意する

・地域の多様な人材が連携して取り組み、無理なく持続可能な活動としていく。

○イベントの開催

・炭鉱都市としての歴史性を活かしたテーマで段階的に地域の歴史や炭鉱を意識づける。

・「地域にとって何が大切か」を常に意識して取り組み、しっかりと心に残る体験にする。

・環境学習をベースに、遊び、語らい、地域支援活動など、多彩な要素を織り込む

＜プロジェクト＞

プロジェクト①

「（仮）幾春別景観公園活用ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ」

・生来の自然環境（地質、地形）の環境学習を通じた地域の地質（炭層含む）、地域の産業史や生活史を楽しく学べる装置と機会の創出

・地域全体を地質歴史公園として、位置づけ、ガイドボランティアの養成

・自然と楽しみながら、学ぶ仕掛けを構築すると当時に舞台環境を整備する

プロジェクト②

「（仮）地域イメージ戦略化プロジェクト」

・炭鉱遺産を巡るパスと幾春別川を利用した生態的コリドーの組み合わせ

・市立博物館のエントランス機能と旧駅舎のノード機能の強化、シンボルとしての炭鉱関連施設の表出化

・休憩拠点の準備＆シークエンスとシーン景観、視点場の保全

・商工業者、農業者等の本業との関係を明確にして参加意欲を高め、連携を強化

・炭鉱施設の拠点化・視覚化・アーカイブ化

・豊富な情報提供＆適切なガイドの育成

プロジェクト③

「（仮）化石、地質探索プロジェクト」

・石炭や化石を使った学習・催し企画

・サイクリングロードを舞台とした地域学習

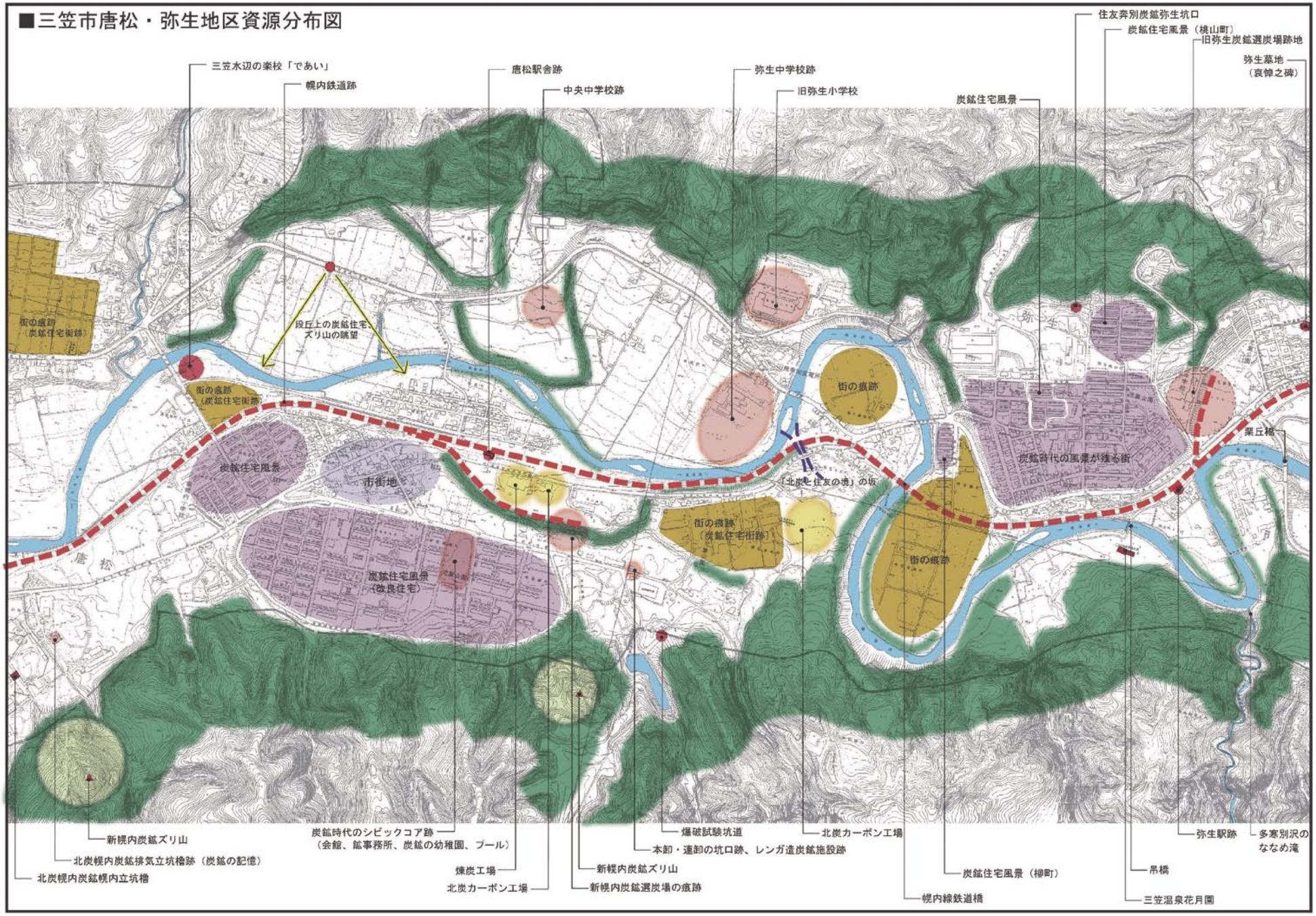
・地質学習体験　・石炭をエネルギーに食の体験　・川沿いの風情の演出

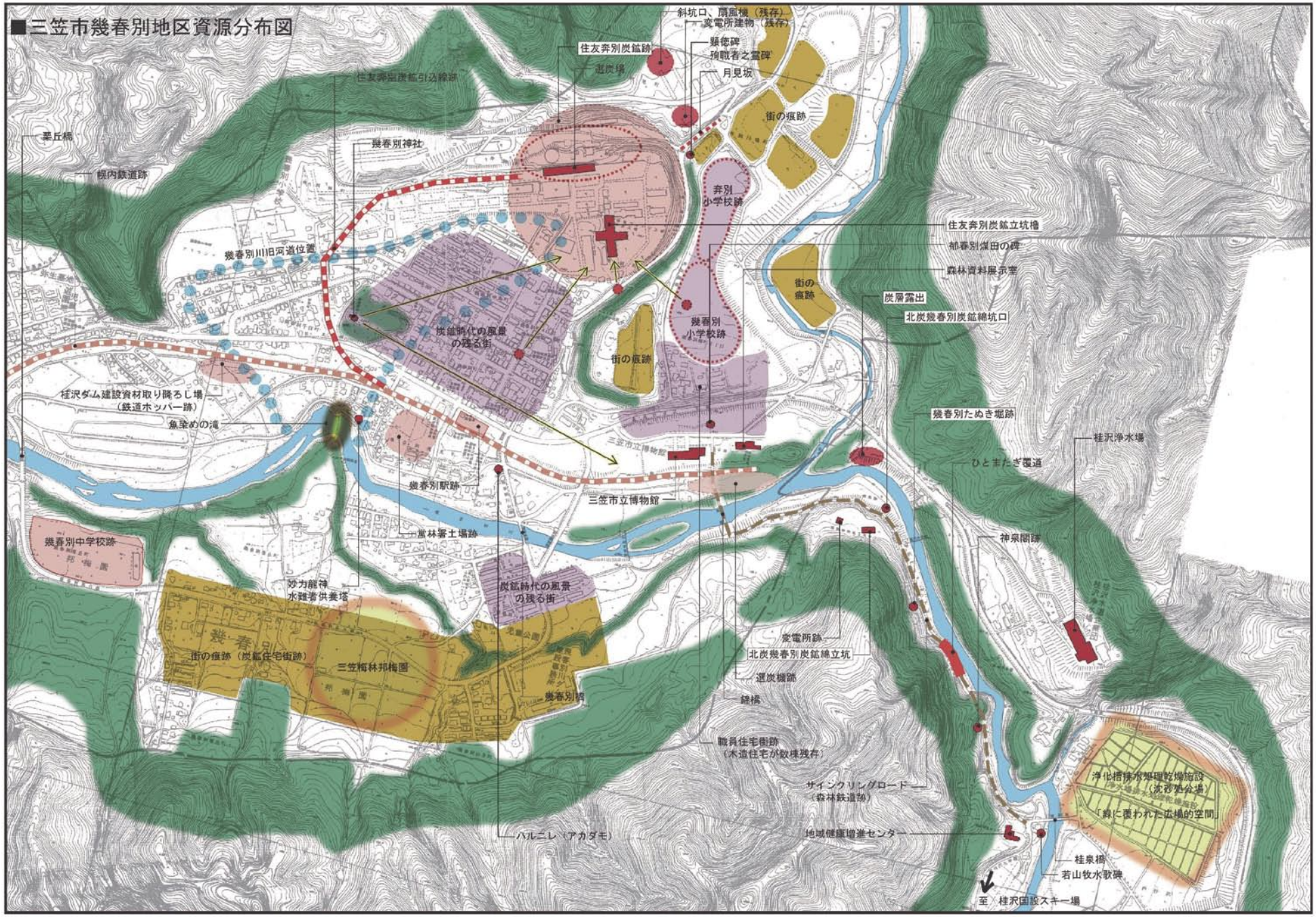
・アーティスト参画インスタレーション会場

・炭鉱住宅を活用したアート合宿

・地下模型や炭鉱システムを伝えるアーカイブ化

■三笠市唐松・弥生地区資源分布図




■三笠市幾春別地区資源分布図
斜坑口、扇風機（残存）
変電所建物（残存）
顕徳碑
殉職者之霊碑
住友奔別炭鉱跡
選炭場
月見坂
住友奔別炭鉱引込線跡
街の痕跡
幾春別神社
柔丘橋
幌内鉄道跡
奔別
小学校跡
住友奔別炭鉱立坑櫓
幾春別川旧河道位置
幾春別煤田の碑
森林資料展示室
街の
痕跡
炭層露出
北炭幾春別炭鉱綿坑口
幾春別
小学校跡
炭鉱時代の風景
の残る街
街の痕跡
桂沢ダム建設資材取り降ろし場
（鉄道ホッパー跡）
魚染めの滝
幾春別たぬき堀跡
桂沢浄水場
三笠市立博物館
ひとまたぎ橋道
幾春別駅跡
三笠市立博物館
営林署土場跡
神泉閣跡
幾春別中学校跡
妙力龍神
水難者供養塔
炭鉱時代の風景
の残る街
変電所跡
北炭幾春別炭鉱綿立坑
街の痕跡（炭鉱住宅街跡）
三笠梅林邦梅園
選炭機跡
幾春別橋
職員住宅街跡
（木造住宅が数棟残存）
サイクリングロード
（森林鉄道跡）
浄化槽汚水処理乾燥施設
（汚泥処分場）
「森に覆われた広場的空間」
バルニレ（アカダモ）
地域健康増進センター
桂泉橋
若山牧水歌碑
至　桂沢国設スキー場

6－4　拠点形成の道具だて

景観づくりを切り口とした地域づくりを他の地区において展開するにあたって、赤平と三笠のケーススタディの検討結果から、汎用性のある項目を拾い出し、「地域の見せ方」と「資源の活用」といった視点で整理を行いました。

■地域の見せ方

地域の始まりのオリジンを伝える

地域の起源、オリジンを知ることは、その地域の理解をより深めることが出来る。

炭鉱まちとして栄えた地域のオリジンを地域アイデンティティを伝える資源として活用することが、地域イメージを確立する上でも重要となる。

歴史的発見のあった川からの視点で地域を見せる

空知産炭地域における炭鉱の始まりは、露頭炭の発見に始まっている。その歴史的な発見は、川を遡ってその川筋に見られた。

かつて石炭を発見した松浦武四郎やライマンといった探検家たちの歴史的発見をトレースするように、川からの視点で地域を見せることも、その地域の「場の記憶」を学ぶ中での貴重な体験となろう。

歴史的痕跡を視覚化し資源化する

空知産炭地域に残る炭鉱遺産は、現存して残されているものから既に撤去されかろうじて痕跡が残るものまで、現状は様々である。

残されているものでも、草や木々に隠れその存在が分からないものも少なくない。

このような目に見えないものを視覚化して資源化することも、「場の記憶」を伝えていくためには重要となる。

ランドマークを望む景観軸を強化する

空知産炭地域で見られるズリ山や立坑などは、地域のランドマーク的景観要素として捉えることができる。

これらを望む視点場や、そこから望む景観軸の環境を、整え強化することによって、地域におけるランドマークとしての存在を強調し、地域の景観イメージを強化することにつながる。

長い期間地域のイメージを強力に発信できる空間を整える

特徴的なインパクトのある景観は、その地域のイメージを強力にする。

空知産炭地域固有の《炭鉱の記憶》を生かし、地域ならではの特徴的な空間をつくり出し、発信し続けることは、地域イメージを確立する上で重要となる。

遠望から見る、近傍から仰ぎ見る、システムを見せる…など重層的に見せる

一つの視対象物を見せるにあたって、遠望から、中景から、近傍から、システムを見せるなど、それぞれの視点に応じた演出や環境を整え段階的、重層的に見せる。

これによって、地域の景観イメージを特徴づけるとともに、「場の記憶」を効果的に伝えることが可能となる。

アートの表現を取り入れ、心・息遣いなど見えないものを形にする

空知産炭地域には、現在も「場の記憶」を伝える景観構成要素としての炭鉱遺産が現存している。かつてそこには、日本の経済発展を支えてきた炭鉱に生きる人々の暮らしや生業があった。

その人々の心や息遣いなど目に見えないものをアートによる表現によって、可視化し景観資源化することによって、「場の記憶」をより鮮明にすることが可能となる。

記憶を伝える写真を活用しアーカイブサインをランドスケープの場に設ける

かつてそこはどうであったのか、どのようなシステムの中でどういった役割、機能を担っていたのかといった、来訪者の知的好奇心を満たし、その場の記憶を後世に伝えていくためのアーカイブサインを、「場の記憶」を有するコンテンツごとに配置する必要がある。

それらは、空知産炭地域のイメージを強力に発信するアイテムとなることから、洗練されたデザインにより、地域アイデンティティを持って産炭地域全域で統一する必要があるとともに、設置する位置についてもランドスケープの観点から緻密に計画する必要がある。

また、現存する施設においても、残されているうちにその記憶を残しておくことが必要である。

時の止まった現実空間を地域らしい生活景としてみせる

空知産炭地域には、炭鉱の時代からあたかも時を止めてしまったかのような暮らしの風景が残されている。長屋の炭鉱住宅を住まいとして、庭先で畑を作り、軒先には畑でとれた大根を干し、共同浴場では地域のコミュニティを育むといった、タイムスリップしてしまったような暮らしの息遣いを感じることができる。

このような地域の生活景をありのまま見せることができるのも、空知産炭地域ならではである。

■資源の活用

地域のオリジナル料理や地場の食材を提供する

来訪者の多くは、訪れる地域ならではの食を楽しみにしている。

来訪者の食に対する大きな期待に応えられる空知産炭地域ならではの、オリジナル料理や地場の食材を使ったメニューを提供することは、その来訪者がリピーターとなることの十分なきっかけとなる。

深く知りたくなる来訪者の関心をそそる資料展示を工夫する

炭鉱を学習し出すと、その歴史やシステムの面白さからどんどんと深みにはまり、もっと炭鉱を知りたいという気持ちになってくる人は少なくない。

歴史やシステムの面白さに関心を持ち、知的好奇心を満たすことのできる資料展示の工夫を図ることも、炭鉱ファンを増やすきっかけとなる。

子供から大人まで楽しく学習できる拠点を形成する

身の回りのエネルギー源が石油や電気の現代では、子供たちに限らず、石炭を見聞きしたことがあっても燃えている姿を見たことがないという人は多くなっている。

石炭が燃えるという単純な体験から、それらをエネルギーとして活用する体験など、子供から大人まで楽しく学習できる拠点の形成も産炭地域ならではのサービスとなろう。

記憶の最も濃密度な場を地域のメイン資源として活用する

動態保存された資源など、《炭鉱の記憶》が色濃く残る場を活用しない手はない。

地域イメージの確立に向けても、それらを地域のメイン資源として有効に活用していくことは重要である。

空き家の炭鉱住宅を活用し、非日常的な空間体験を提供する

かつて炭鉱マンとその家族たちがひしめき合って暮らしていた炭鉱住宅も、今ではただの空き家となっているものは数多くある。

このような空き家の炭鉱住宅を、宿泊施設や休憩拠点、体験学習拠点や工房など、新たな機能としてその有効活用を図り、地域外の人に炭鉱の暮らしの疑似体験といった非日常的な空間体験を提供できるのも、空知産炭地域ならではの体験である。

地域に離合集散の活動拠点を整える

知らない土地を訪れたとき、その地の情報を得ることができなければ、人はその地をどの様に回って良いか分からず、素通りしてしまうだろ。

回遊を促すには、その地域に情報を得ることができる離合集散の活動拠点があることは重要である。この拠点は、地域外の人にとって分かりやすく立ち寄りやすい場所にあることが理想である。

6－5　具体化の手順

今回の戦略策定にあたっては、地域政策の観点から望ましい地域の全体構造を構想する一方で、その具体化を担う地域単位の取り組みを担保する観点から、広域景観を切り口に検討を進めてきました。

景観は、地域の現状だけでなく、過去からの経緯や蓄積、未来への方向性や意志を、具体的に示すものです。また景観は、視覚だけではなく、聴覚・嗅覚・触覚・味覚という五感も対象とする総合的なものです。

新しい現実を創造することが、この戦略の流れに多くの人が注目し参加する原動力となります。その際、具体性・総合性のある景観からのアプローチは、具体化の先導役として期待されます。

そこで、特に景観の観点から見た、具体化の手順と留意点について、以下に詳述します。

■広域景観形成につながる「場の記憶」「炭鉱の記憶」の活用

空知産炭地域固有の景観特性を検討する際の基軸

何もない所から新しいものを作るのは、とても難しいことです。空知産炭地域には、炭鉱遺産という歴史的・地質学的・文化的資源があります。

これを活用するためには、まず、過去の経緯や責任を追及するのではなく、問題を共有することを念頭に置いて、

○「負の遺産」というイメージの生成と影響を冷静に見極めた上で、炭鉱施設跡などを「負の遺産」の棄地として捉えるのではなく

○ものづくりの伝統を育んだ文化遺産として見直すなど、問題の本質に迫る処方を

○地域住民のみならず来訪者を含めて、誰もが自然に感じとり考える場

として、保全・形成することを、空知産炭地域固有の景観特性を検討する際の基軸に据えます。

炭鉱遺産が持つ意味のオリジンと多様化

炭鉱が閉山し一世代が過ぎ去ろうとしている今、炭鉱施設跡をみても、多くの人は、形状から受ける印象にとどまり、意味が分化し、解体しつつあると言えます。

「場の記憶」を通じたまちづくりには、本質的な意味の保全と同時に、新たに付加される発見と更新に留意しつつ、記憶を積み重ねることが求められます。

それゆえに、空知産炭地域の文脈を読み解いて、今後の地域づくりを展開するには、これまでの文脈＝地域の固有性、地域のあり様、個性を自覚することが不可欠です。

地域の個性が分かっていなければ、変化を適正に受け止めて馴染ませていくことはできません。

空知産炭地域の歴史を見ると、そこには、人間と自然とが、時に睦みあい、時ににらみ合い、その果てに何とか折り合いをつけてきました。人間の痕跡が刻まれた景観、それはそのまま地域の歴史の歩みを表しています。

今、ここで論議している景観は、決して過去の遺物にしがみつく歴史ではありません。

■地域連携による広域景観づくりの考え方

基本的な考え方

【物語が必要】

物語性に富む風景は、そこに生きたストーリーが付与されることで輝きを増します。地域内の人が、自分たちのまちに誇りと愛着を持ち、自信を持って自分達のまちを語れる物語づくりが必要です。

【産炭地域共有の地域アイデンティティを物語へ】

褶曲・断層地形に沿って作られた谷間の景観資源、他の地域にはみられない炭鉱というオリジンを持ち、栄枯盛衰を描いた濃密な歴史とそれを物語る炭鉱遺産など、地形と歴史に深く刻まれた景観を有するという空知産炭地域独自の大きな特徴を持っています。

これらを、空知産炭地域共有の地域アイデンティティとして最大限に活かし、物語をつくりだす必要があります。

今あるまちを、そのままに保存するのではなく、まちを構成する要素を読み取り、歴史的な経緯に沿ってそれらを強化し、まちの魅力にさらに磨きをかけ、「普通のまち」を「特別なまち」へと転移するのです。

物語づくりの第一歩ー「普通のまち」を「特別なまち」へと転移する方法

「普通のまち」から「特別なまち」へと転移する方法として、次の三つの手法を用います。

❶ 景観の総浚えから特別なものを見出す

❷ 現在の都市の構造から景観上重要なところを掘り出す

❸ 都市空間の意図を読む

これら三つの視点でまちを見直すことが、物語づくりの第一歩となります。

❶ 景観の総浚えから特別なものを見出す［モデル検討地域:赤平、三笠（幌内）］

景観の魅力は、単に不可視なのではなく気づいていないだけで、詳細に検討すれば、価値ある景観が見えてくる場合も少なくない。

タウンウオッチングや百景選び、瞬間情景、祭礼や行事などに現れる祝祭的な空間のしつらえや歴史上意味ある空間など、個々の場所性を評価する視点は多様である。

その手がかりは、山や谷、川、高台、道路、シンボル、所縁、建築様式など様々な場所に隠れている。

❷ 現在の都市の構造から景観上重要なところを掘り出す［モデル検討地域：赤平、三笠（幌内）］

駅周辺の通勤帰宅の主要経路、目抜き通り、歴史的な街道、社寺の参道空間など、普段何気なく行き来している普通の空間に過ぎない場所が、晴れの場面で祝祭の場となることもある。

日常的な空間として当たり前であるがゆえに気づかないことも多く、ものの見方を少し変えてみることや、時には外部からの目でまちを見てもらうといったことも必要である。

❸ 都市空間の意図を読む［モデル検討地域：赤平、三笠（唐松・弥生・幾春別）］

まちの立地やその後の変遷を振り返り、その変化のありようを検討することを通じて得られる知見を基盤にまちを見直すという手法である。

地形と歴史は、現在のまちを形づくる二大要素である。地形と歴史の両方の視点から、いかにしてまちができてきたかを知ることは、まちの構造を見定めることにつながる。

「意図」は、間違いなく地形や歴史、そこでの生活風景と密接にかかわり合っている。

先人がまちを形成するのに見据えたであろう「構想力」というものを解読することによって、都市の各空間が今後どのような役割を果たすべきなのかを展望することが可能となる。

このように、都市を解読するプロセスの中で、都市の今日の姿自身を物語化することができ、物語化して初めて、動態的なまちづくりが生まれるのです。

地域連携による広域景観づくり

ケーススタディを行った赤平市や三笠市（幌内地区、唐松・弥生・幾春別地区）を、空知産炭地域の先導的モデルとして景観づくりに取り組んでいくことを提案します。

これら拠点での先導的な取り組みが、他の地域へとネットワークし、広域的な景観づくりへと結実します。

○連携した取組が必要

個々の地域がばらばらに景観づくりを行うのでは、そのイメージ発進力は弱くなってしまう。

各地域が広域的に連携し補完、役割分担しながら相乗効果をもたらすことによって地域全体の魅力を高め、より強力な発進力を持った空知産炭地域全体のブランドイメージを形成していく必要がある。

○近隣からの小さな連携から取り組む

連携的な取り組みを実践する際には、空知産炭地域は各地域が谷によって隔てられ、谷のすそ野の沢沿いにそれぞれが独立して集落を形成しているため、谷を越えて連携するイメージを抱きづらいのが現状である。

このため、広域連携の手順としては、まずテーマを共有して取り組める近隣の地域同士が一つのエリアとして連携することから始める必要がある。

エリアの組み方は、石炭の発見の歴史的経緯を共有できる地域エリアや、沢ごとの地形的つながりにより連携できる地域エリア、地下の炭鉱システムによりつながりを持った地域エリア、あるいはアートや

食など各地域での取組の現状や可能性から共有のテーマを持って連携できる地域エリアなど、幾つかのエリアを形成し取り組むことが考えられる。

○各エリアの取組から広域的な取組へ発展させるプラットホーム

個々のエリア内において、それぞれの地域が個々に有する地域資源、景観資源を有効に活用し、役割分担と連携を明確にした戦略的な拠点形成を行い、エリアとしての魅力を高めた取組を行うことが必要である。

そして、各エリアにおける取組が熟成してきたところで、エリア間連携による取組へとステップアップし、空知産炭地域全体の取組へと発展させるプラットホームを立ち上げる。

産炭地域の統一イメージの発信

各地域、各エリアにおける連携した取り組みを推し進める一方で、空知産炭地域全体として取り組むことが必要なものもあります。

それは、空知産炭地域が全体として統一したイメージを発信するために必要な仕掛けであるとともに、外に対して空知産炭地域のイメージを印象づけるほか、地域内の連携意識の醸成や取組意欲を高揚させるといった効果を有するものです。

○産炭地域へと誘導するアイキャッチの仕掛け

その仕掛けの一つは、広域幹線道路から産炭地域へと誘導する結節点でのイメージ発信である。

産炭地域へのアクセスは、空知地域を縦貫する広域交通網の国道 12 号線より、石狩川の各支流に沿って櫛の歯状に入り込んだ国道や道道のアクセス路に乗り産炭地域へと入っていく。あるいは、高速道路を利用しインターチェンジ出口からアクセス路に乗り産炭地域へと向かうルートが主流と考えられる。

この国道 12 号線や高速道路から産炭地域へと向かうアクセス路の結節点において、産炭地域へと誘導するアイキャッチの仕掛けとしての案内サインが必要であるが、各サインがばらばらのイメージを発信しないよう、統一したデザインを広域で連携し計画することが必要である。

「産学官民」の連携で取り組む

広域連携は、行政の枠にとらわれるのではなく、企業や大学との連携を深めるなど、新たな視点を持って取り組むことが必要です。

空知産炭地域での市民活動は、すでに全力を出し切っている状況にあり、外部の応援や新たな視点を持った仲間を必要としています。

この戦略を策定するにあたっては、これまで多くの大学の専門家を交え検討してきた経緯があります。今後は、これまでの検討の成果を活かし、より実践的な取り組みを行う必要があります。

産業界はその活動を通じて利潤を追求し、大学は真理の探究と学生の教育を目的とし、行政は地域産業の振興と活性化を推進し、市民は暮らしの安定と充実を達成しようとし、各々の立場･視点･アプローチは異なるものがあります。しかし、共通の認識を抱き「産学官民」の連携によって取り組む必要があります。

地域連携のきっかけと活動の場づくり

ここ 10 年、活発に展開されてきた《炭鉱の記憶》を活用した市民活動は、「やるべきこと」「やりたいこと」についての強い思いを持ちながらも、人材や活動財源不足などの問題を抱えています。

この状況を打開し次なるステップへと踏み出すためには、「キッカケ」と「場」づくりが必要であり、次のステップで取り組むことを検討します。

① 小地域のエリアプラットホームを立ち上げる

景観をテーマにしながら、地域間連携や、地域の農・商・工連携による地域の活性化を見据えた小地域のエリアプラットホームを立ち上げる。

きっかけの声かけと検討の場は、空知支庁が地域の活動団体や市町等の間のパイプ役となって仕掛け、支庁内の横断的応援体制を整える。

スタートアップのための既存施策の柔軟な運用の可能性や、国の「地方の元気再生事業」などの公的助成制度の導入を検討する。

② 民間の自主的な運営にバトンタッチ

「そらち温泉ネットワーク協議会」の事例にみるように、可能性と方向性が見えた時点で、民間の自主的な運営にバトンタッチする。

■ 景観を契機とした地域再生の実践

空知産炭地域の景観の見せ方

【地域を学び、ゆっくりと見ることからはじめる一導線と動線づくり】

空知産炭地域の景観は、意識せずに走り抜けてしまうと、その魅力は伝わってきません。足を止めじっくりと見て感じるのが、この地域にふさわしい景観の楽しみ方です。

地域外からの来訪者に足を止めてもらうには、まず地域内の人が、目の前にある歴史の痕跡から、先人の知恵を学ぶことが必要です。そして、それらを地域外からの来訪者に伝えるのです。

そのためには、まず興味を持ち空知産炭地域に足を向けさせる「導線」づくりが必要となります。

そのためのツールとして、地域の景観イメージの強化やランドマークの存在を強調する軸となる景観づくり、拠点までの誘導を促す誘導サインの設置、テーマを持ったガイドブックや興味をそそられる総合案内マップの作成などが考えられます。

次に、一度惹きつけた来訪者に地域の良さを伝える仕組みとして、地域住民によるガイドや案内板の設置など、知的好奇心を満たすことの出来る仕組みが必要となります。

また、これらの仕組みを活かして、空知産炭地域に何があり、どんな営みがあったのか、思いを馳せながら感じてもらうための動線づくりの仕掛けとして、ゆっくりと歩いて・見て・感じてもらう Park（景観公園と駐車の両義）& Walking を図る必要があります。

物語性に富む風景は、そこに生きたストーリーが付与されることで輝きを増すことから、ストーリー展開に即した舞台環境を整えることが求められます。

それだけでは多くの人を呼び込めないことから、地域の食の楽しみ、農業体験や自然体験の楽しみ、アートのエクシビションや地域のお祭りなどのイベントを絡ませ、訪れる人にとって、より魅力的な滞在環境となるようにする必要があります。

空知産炭地域における取り組みのきっかけ

【何からはじめよう一突破口としての取り組み】

地域でまずはじめることは、地域資源・景観資源の確認を行い、地域のビジョンを描くことです。

地域ブランド化を促す景観イメージの活用方策として、また地域内外に発信する可能性と実現化のための課題解決方策として、次の3つを突破口にした取り組みを提案します。

❶ 景観づくり

❷ イベント

❸ フットパス

これら3つの取り組みを突破口に、炭鉱遺産の保全・活用や、地域の景観形成をすすめ、少しずつ広域的な連携による取り組みへと展開していくことが望まれます。

赤平・三笠でのケーススタディが示すように、誰が何を行うかの担い手の検討を行い、それを行う上での障害や問題・課題についての検討が必要です。

❶ 景観づくり一舞台背景としての地形と歴史に深く刻まれた景観の表出

地域 Identity としての景観イメージづくり
景観資源として大切に扱っている姿勢を示す
イベント、フットパスづくりと連携した景観イメージの発信
炭鉱地域の住環境コミュニティの再生景観

❷ イベントの開催をきっかけとして

炭鉱都市としての歴史的文脈を活かしたテーマ設定を行う
何が大切なのかを常に意識する
連携して取り組み持続可能な活動としていく

❸ フットパスを活用したきっかけづくり

歩くことからはじめる
様々な取り組みの動機となるフットパスの可能性
本業と関係のある人を巻き込む
地域で生活している人を巻き込む